

省エネ女子高生と悪ガキツインズ①

なしあじ

社会契約説でおなじみ・ルソー君。彼はそれまで未熟な大人として見られていた子供を、独自の世界観を持った尊重されるべき存在として見直したという。

現代人の私は、そう主張したルソー君を固く握りしめた拳で、鼻先が折れるまで殴ってやりたい。教科書に載る偉人だからと言って容赦はしない。

幼児期は許せる。何者にも染まらない、天使のような時期であるのだから。

一方、SNSだのYouTubeだのを使いこなしたナウい小学生・中学生というものに独自の世界観というものはない。社会の一端すらも知らないくせに、背伸びして年長者に舐め腐った態度を向ける、ある意味未熟な大人——端的に言えばクソガキを、どうして尊重する必要があるのか？ いやない。

こうして雄弁に語る私も華の高校2年生女子。人生のペテランからすれば、私もクソガキにカテゴライズされることは重く承知している。お前が言うんじゃねえ、と。しかし、社会の一欠片くらいは心得ているつもりだ。対して、真のクソガキどもは一欠片すらも確実に心得て

いない。無知だ、無能だ。

まともりなく主張をあれこれと垂れ流してきたが、私  
がまさに言いたいことはたったの一文に集約される。

—子供なんて嫌いだ！ バーカー！

……勢いあまつて、二文になってしまった。お詫びして訂正しよう。

とにかく、先に挙げた理由も含めて、**さ・ま・ま・な・要・因**が絡み合い、私は子供を好きにはなれないのである。

〓五月某日・シェアハウスは突然に〓

〓2年目。私、いちじょうりん一条鈴の今日の放課後ライブは洗  
物の溜まった台所からスタートする。カラオケやゲーム  
センター、ファミレスとは決して交わることはない。

理由はシンプルなものである。

一人暮らしをしているから。母の方針によって。

唐突だが、私の母はキマって、いや、イカれている。

一人暮らしの学生など学校には存在しない上、その学校  
が隣の市にあっても電車で通えばいい。それを聞けば、

大抵の人間は高校生の息子娘に一人暮らしをさせないだろう。

「おっ！と……」

しかし、母である一条麻紗美とかいう人間はその『大抵』とやらには含まれていなかったらしい。「ちようどいい機会だから、一人暮らししてみそ」と仰せつかつて、今、無駄に広いアパートの一室に寝床を構えている。いい機会とは？ ミステリアスな論理を思い出すたび、辟易する。辟易して、泡を纏った滑らせ平皿を割りかけてしまふ。

こうして1年前の高校デビューから今の今まで、洗いや物はもちろん洗濯・掃除・炊事エトセトラ、生きるためのほぼすべてのことを高校生ライフと共存させているわけだ。

では、この生活に従順、もとい理解を示しているかと問われると、絶対的ノーだ。変人の考えなど、理解できたくもない。

だが、常日頃から変人にヘイトを溜めていてはそれこそこちらまでも毒される。程々の速度で自転車走らせ帰宅し、それなりの労力で皿と部屋をさっぱりさせて、のち相容れない数学さんと適度に格闘する。

なあなあに目の前のタスク、時に理不尽に突っ込む。これこそが変に体力労力を使わず、変人にもヘイトを溜

めずに済む最高の生き方である。

水切りが皿や茶碗でいっぱいになり、部屋に散らばる洗濯物を投げモノゲームかのごとくかごにぶち込んだところで、ひとまずのミッション遂行。各隊（孤独な私）休息に入る。

「ほお……」

休息の相棒は熱々のインスタントカフェオレ。粉を振り入れ、煮えたぎったお湯を注げばあつという間に眠気覚ましになる代物だ。勉強机の椅子に深く腰掛けて、山吹色のマグカップからぬくもりを感じれば、なんと至高のひとつときだろう。吐息もこの上なく安らかになつていく。

ジャケットを脱ぎ、シャツのボタンも第2まで開け、股をだらしなく広げる。一介の熟練サラリーマンとも大差ない姿であろう。とてもこのザマでは人様に顔向けできない。だが、それでいい。おおよそ誰にも干渉されない一人暮らしなのだから。

そうして私はどこまでも、夕暮れの部屋の中で伸びていく。椅子の上で。液体にも似た猫のように。抜けるだけ、気を抜いていく……

——ピンポン

しかし、呼びりんという邪魔が入る。室内を甲高い調子よさそうな一音が突き抜けていく。

休息時間を妨害されたが、決して不快ではない。来訪者は、自堕落に伸びる私など知る由もないのだから。だが、あまりにも私が不用意で、構えていなかったから玄関に向かおうにも一歩が不安定である。怒りを抱えた人間が地団駄を踏むようだ。

「鈴いる？」

「あっ、亜紗美さん」

ドアに張り付いてドアスコープを覗き込むと、その先には真っ赤なサルビアをあしらったトップスに身をくるんだロングパーマの弱冠マダムが。姿勢よくドアが開け放たれるのを待っているようだ。

無論、それが誰であるか知らなければ呼名などできるはずもない。

その正体は——私の叔母、イカれた母の妹、大久保

亜紗美さんである。

「やあやあ、突然押しかけちゃって悪いわね。帰ってきたばっかり？」

「いや、洗い物とかしてたから結構経つよ」

「あっそ」

帰宅してもなお制服姿であることに気が向いたのか、亜紗美さんは申し訳なさそうに構えた。だが、私が否定するや否や素っ気ない対応を取る。なんと現金な人であるか。

血のつながりがある人に美人だなんて評価を下すこともおかしな話ではあるが、実際年齢相応の深みある美しさで、若輩者ながら感心してしまう。

そんな美人が平々凡々な姪に何の用があるのか。不思議でたまらない。

「それでどうしたの？」

「うんしょ、えつとね、ちよつとご相談。別に難しいことはないから」

「へえ」

亜紗美さんはいかにもキャリアアウーマンといった黒いパンプスを乱雑に脱ぎ払って、玄関先の段差を動きしなやかに躲す。

果てはご相談。ベテラン大人からすれば小童の私に何を相談したいという。

「まあいいや。とりあえずあっち行って話そう」

意図の読めない人を、我が家のコアへ誘う。短い廊下ではあるが先導させていただく。

そして部屋に通すと、亜紗美さんは何やら品定めでもするかのようには部屋を見回す。やり手の不動産屋でも来

たのかと錯覚してしまう。

「ほんと、女子高生一人の身に余る部屋ね。余剰あるじやない」

「それはあなたのお姉さまに言ってほしいな。私は高校生の中から一人暮らしなんて考えてなかったけど、あのパパ、じゃなくて母親の策略だからさ」

なぜか亜紗美さんは、質室の大きさに触れる。すっぴんのかんの部屋は、目につくのだろうか。

「自分の母親をババアって言いたいのは分かるわ鈴。でもそうなると双子の妹であるところの私もババアってなるからやめない？」

「AイコールB、BイコールC、ゆえにAイコールCを証明する意図なんてないよ」

「わざわざ言わなくていいわよやかましい……」

丸い座布団に尻もちをつくと、言葉の応酬を重ねて亜紗美さんは日数の経った花束みたいに萎れていく。

私の母イコールババア、双子であるから私の母イコール亜紗美さん、ゆえに亜紗美さんイコールババア。無理やりながら私からこんな論理を提示したから、亜紗美さんががっくりとするのも無理ない。

だが、それがおもしろいもんよ。

「それで？」「相談ってのは何？ 私じゃ力になれないと思うけど」

心の中で興じつつ、数分前まで猫になっていた椅子に

腰かける。

「あ、そうそう。私、来月からまた海外赴任になるのよ」

「ああ聞いたよ母親野郎から。一年間だっけ？」

萎れたサルビアはあつという間に大人の余裕を見せつける社会人へと舞い戻っていった。

それもそうだ。亜紗美さんは某有名外資系企業の最前線に立っているそうで、文字通り世界を股にかけるセシル・ローズ人間。さも当然かのように海外への出張や赴任がある人が、いつまでも小童一人の戯言ごときで枯れてはいられないだろう。

「その通り！ それで問題なのが、双子なのよ」

「ほう」

この相づちは、闇がフラッシュバックしたが故のもの。身震いがする思いだ。

子供なんてものは所詮クソガキ。そんな思想を私は持ち合わせているわけだが、特に大久保家の双子、この二人は群を抜いたクソガキだ。ときに私の風いである日常を荒らしにやってくるそいつらは、できることなら二度とお会いしたくないものである。

私が震えても亜紗美さんは間髪入れない。

「旦那は当分こっちに戻らないからお守りをアテにできないし、かといって五年生のふたりを今さら友達から離

すのも酷な話だし。どうしたものかしらね、と」

「ほ、ほう」

そしてこの相づちは、亜紗美さんの思慮深さに感心してのものである。

自分自身のみならず、パートナーまでもが海外にて多忙を極めるビジネスマン。自分が留守にする間、息子たちをどうするかということを選択肢が少ないというのに、最大限我が子のことを優先するその姿。子供、さらに言えば双子は苦手、嫌いではあるが、その亜紗美さんの心持ちだけには賞賛を送りたい。いや、実際に送る。淡々としてはいるが。

「ああうん、そうだね。私はチビども好きじゃないけど、小学校高学年の時期に友達から離されるのは私としてもアレだし、教育的にはいいんじゃないかな、うん」

自然と首を縦に振っているくらい、亜紗美さんの言うことには筋が通っているし、非の打ち所もない。

だが。

「で？」

「ええ、結論ベースで話を始めなかったの後悔してる」

私に何を求めるといえるのか、結論がない。ご立派な方針ではあるが、それをただ私の耳に入れるだけでは、ご相談ではなくただの世間話である。ただし、わざわざ親戚の女子高生と世間話をするためにここに来る暇こそ無いだろう。

亜紗美さんの言う通り、論理展開の致命的な間違いということだと思われる。

「端的に換言すれば、そうね、私が不在の間の一年間、双子をここに住まわせてほしいってこと。ここなら学校の学区内だしね、離れる必要がなくなる」

「なるほど、そういうこと」

苦節十数分。ようやく亜紗美さんが何のためにここへ突然やって来たのか、腑に落ちた。双子の仮住まいの依頼らしい。なんとシンプルな目的であろう。

——しかし、その目的が常に私と相容れるとは限らない。

「ほいで亜紗美さん、正気？」

「私はいつだって正気よ？ 鈴の母親的にはそうじゃないのかもしれないけど、私はいたって正気」

「ちよつと何言ってるかわからない」

「なんで分からないのよ」

半笑い気味で亜紗美さんと聞いたことがあるようなセリフをやり取りしあう。

だって、あまりにも受け入れ難いから。

トラウマ双子をここに住まわせる。それも高校生である私を保護者とした三人での共同生活。

冷静に亜紗美さんの言い分を整理しようとしても……より強烈な焦燥感が私を襲うのみだった。省エネを自称するはずの私は、気が付けば燃料フルチャージの声を亜紗美さんに浴びせていた。同時に跳びあがっていた。

「いやいやいや！ そんなの無理だよ！ 私がそんな無理難題応えられないはずないでしょ!!」

「ちなみに、一条本家には許諾もらった上に謝礼金も納めてきたから、拒否権は無いわよ?」

「だったら相談じゃなくて最後通牒じゃねえか！ 私は議論の余地を奪われた日本軍か！ それとあの母親からは後で慰謝料踏んだくってやる……」

「親族間訴訟は泥沼化するわよ?」

私の母は、私自身の同意なく亜紗美さんの頼みを聞いたということになる。そう分かると、この世に生を受けてから最も腹が立つてきた。亜紗美さんのどこか他人事のような投げかけも、それを増長させていく……  
疲れたわ。

「まあ、そんなに怒りなさんな」

「それは誰のせ……もういや」

相当量のエネルギーを使えば、当然休息が必要。エネルギーの備蓄が少ない私は、腹立たしさを抱えながらも亜紗美さんをはじめとする諸悪の根源に表面上対抗するのをやめた。すぐに。しんどいから。

それを視認した亜紗美さんは、立ち上がって、去り際に何かを言い放つ。

「それじゃあ早速今夜から双子たち住むからよろしくね」

「いくら血縁関係といえど抹殺を免れないッ」

その何かは、戯言であり、死刑宣告であった。その死刑宣告を前にしては、私はまな板上のコイである。

今夜から？ 控えめに言ってふざけんな。

そして、亜紗美さんの不可解な行動にもさまざま合点がいった。

「もしや部屋数気にしたのって……」

「ええ、あの子たちの部屋あるかなと。一応鈴ズ・マザーには聞いてたけど、前評判通り空いててよかった」

「もう何言ってもダメなんすね」

これ以上私がどれだけ反抗を示しても、亜紗美さんはしたり顔を続けるのみである。その顔のまま、こちらに背を向けて玄関へ。私は置き去りにされる形だ。

「ほな、よろしくや」

「一年がかりのプランなのにノリが軽すぎるよ……」

あっけなく亜紗美さんと別れようとしたとき――またはああの調子よさそうな呼びりんの音が室内に木霊する。

そのすぐ次には、ドアをこれでもかと強打する鈍い音が鳴り響く。

——それは、地獄の一年間の始まりを告げるゴングであった。